



病院図書室が目指していく『情報リテラシー』教育の方向

寺野 康宣

I. はじめに

急速に進歩し、渦のような流れをもつ医学情報の動きを的確に捉え、収集していくことは大変である。その状況にいるメディカルスタッフ達は、あらゆる手段で情報を多方面から入手していく。その中で身近な情報収集の場として、病院図書室を選ぶ。無論、病院図書室を管理している我々図書館員（図書室員もしくは司書かもしれないがここでは「図書館員」とする。）も、利用者となりうるメディカルスタッフの為に、多種多様な情報を収集し、提供していかねばならない。利用者の要求に応え、有効な情報を活用させる為に、我々図書館員は果たして何をすべきなのであろうか。

それは、病院図書室において、図書館員が、利用者が求めようとしている情報を的確に入手できるようにし、それを評価し、利用する能力を身につけること、つまり、「図書室利用者教育（以下『利用教育』とする）」については『情報リテラシー』教育を提示し、実行していくことが大切ではないだろうか。

今回のこの論文では、従来主眼におかれていた『利用教育』から一歩進んで、病院図書室が目指していく『情報リテラシー』教育を考えていこうと思う。

II. 『情報リテラシー』教育とは？

これまで病院図書室では、『利用教育』を積極的に行い、その成果として、数多くの関連文

献を世に送り出している。限られた図書館員の人数の中で、先駆者達は、多くの至難にめげず、効果的な方法を作り上げたり、時には斬新的な方法でも行ってきた。

近年、大学図書館を中心に、『利用教育』からさらに一歩進む形として『情報リテラシー』教育が芽生え始め、動き始めている。ところで、この『情報リテラシー』とは何であろうか？

『情報リテラシー』とは、「図書館情報学用語辞典（日本図書館学会編）」では、次のように定義している¹⁾。「さまざまな種類の情報源の中から必要な情報にアクセスし、アクセスした情報を正しく評価し、活用する能力。具体的には以下の能力を含む。(1)情報へのアクセス：さまざまな種類の情報源について熟知している。実際にレファレンスブックや各種データベースなどを利用して、必要な情報にアクセスすることができる。(2)情報の評価：精度や再現率などから、アクセスした情報の正しい評価を行うことができる。(3)情報の活用：既存の知識体系の中に、新しい情報を統合することができる。問題解決にあたり、情報を有効に適用することができる。」である。しかし、この『情報リテラシー』教育を十分に受けている人は、少ないと推察される。

『情報リテラシー』教育は、人が成長していく過程において、さまざまな経験を積む事で開花していくスキルである。初等教育、高等教育といった教育機関で、充分に行われている教育であることが本来は望ましい。しかし、日本の高等教育では、情報リテラシー教育を教授され

てらの やすのぶ：日本赤十字看護大学

ることも少ないし、批判的思考、問題解決能力、情報評価を育むことは少ないと思える。そしてもっと広く市民社会生活全般にとって、偏向や事実などを見極める批判的な情報評価の能力が必要となっている。

Ⅲ. 病院図書館での「情報リテラシー」教育への公算とは？

これまで「情報リテラシー」の重要性を認識し、行ってきた病院図書室では、メディカルスタッフを対象とし、各種業務や研究を統合させ、情報資源の利用スキルを身につけさせる事に意識を払ってきた。それは、次のような公算が得られるものである。

1. 図書室の重要な役割を実証する。

- スタッフは日常業務、研究を研鑽することは日々行われることなので、自然と図書室を利用しているが、それによりさらに図書室利用を促進したり、自らが他メディカルスタッフへの図書室利用の手本となることがある。

2. 自立した利用者を増やす。

- 図書館員は、レファレンスデスクで初歩的質問を繰り返し受けることを避けられ、また病院全体としては、賢い情報消費者であるメディカルスタッフという労働力を得られる。

3. コミュニティの育成を援助する。

- メディカルスタッフ全体に、多種多様な意味でのコミュニティ構築への言質が得られ、援助する。コミュニティが育成されれば、病院全体の情報と知識を共有することができる。

4. メディカルスタッフへのサービスを促進する。

- 図書館員がよりよいサービスを提供するのに役立つ情報、すなわち「メディカルスタッフがどの資源に関心を持ち、また所有しているか」という情報を得ることができる。メディカルスタッフのニーズを極めること

により、病院の中で資源共有も進み、情報システムのニーズに組み入れることができる。

5. 図書室の広報を行う

- 財政上の権限を持つ管理者らに対して、図書室が重要なものだと言え、管理者自身が積極的利用者となれば、図書室は十分な財源をもつ価値があると判断され、資源や職員に関して、他の部局と匹敵できるようになる。

しかし一方、「情報リテラシー」教育を開発し行うことは、「図書館員はサービスを提供すべきか、それとも行わないべきか」という哲学的ジレンマを図書館員に突きつけてくる。図書館員は、職員の人数や能力、優先事項、関心を把握し、計画に反映させなければならない。図書館員は情報教育者として、また提供者としての役割のどちらに比重を置くかを決め、まずもって障害となるヒトとカネの問題と戦わなくてはならない。この問題に対しては、多くの人が論じ、様々な解決策を模索しているが、まず「走り出すこと」が肝心なのである。

Ⅳ. 職場（病院）と図書室の「情報リテラシー」教育への統合

職場（ここでは、「病院」と仮定する。）との統合していく情報リテラシー教育の開発の前提として、まず重要なことは、職場の役割である。そして、従来の病院図書室で行われてきた「利用教育」の方法に付加価値をつけ提供していくことが大切である。全てのメディカルスタッフが、統合の重要性を認識することが必要であるが、この認識を喚起するのは困難かもしれない。しかし、「情報リテラシー」教育に関する興味や関心はさまざまである、ということに留意していけば、図書館員は仕事上、または個人生活上有用な資源へと全てのメディカルスタッフを導く事ができる。前提としてもう一つ重要なのが、利用者ニーズの把握である。図書館員は、既にある有用な情報資源や、新規に獲得した情

報資源の存在をメディカルスタッフに訴えていくべきであるが、情報リテラシー教育にあたり、利用者のニーズを把握することも重要である。把握する方法として、例えば、カウンターでの利用者とのカウンセリングにおいて、ニーズや関心から情報探索行動まで把握していく必要がある。

V. 考察

最後に、メディカルスタッフへの『情報リテラシー』教育を促進していくにあたって、図書館員に向けての提言を述べる。

1. 管理、人事職員の協力

新しいことをするには図書室外から人を必要とするので、特に管理的立場や人事部の職員の援助を求めることから始める。

2. オリエンテーション

図書館員が、病院全体として行われている新しいメディカルスタッフ（新規でなくてもよい）のオリエンテーションにも参加し、図書室のオリエンテーションをそこに組み込んでいく。

図書室のオリエンテーションは、与えられた時間を有効に使うことが大切である。資料配置、利用規則といった簡易的なオリエンテーションにするのか、OPAC・CD-ROM検索、二次資料の検索など時間を要するオリエンテーションをしていくのかを、時間を有効に使えることを考えていく。

図書室の利用規則、資料配置、二次資料を説明する際には、メディカルスタッフにとって興味深い、仕事関連または娯楽的資料等を紹介していく。あまり形式ばらず、気楽な形で行うほうがよい。一方的な説明はさけて、簡易でわかりやすい資料を作成し、配布する。

3. 適応化した指導

対象となる利用者の必要とする情報を的確に見極めて教育を行う。またどんなサービスが最も適切なのかも検討していかなければな

らない。図書室でメディカルスタッフ研修という形のプログラムを作り、情報の重要性を訴える。通常のセッション形式やワークショップというかたちで、メディカルスタッフに機会を提供することもできる。

4. 効果的なPR

図書室案内（パンフレット）やPR資料の中身が、すべての人をターゲットにしているかを吟味する。多種多様なメディカルスタッフについてももしっかり触れ、病院内でのニュースレターでの広報を行うなどして、全ての職員に対して効果的な図書室PRを行う。

頻繁に情報を利用し、仕事上や個人的関心に適切で様々な資源に詳しいメディカルスタッフはたくさんいる。しかし、全てのメディカルスタッフがそうではない。こうした多様化したメディカルスタッフにこの認識を広げていくことの利点は、病院図書室にとっては大きく、図書館員はその役割を負う立場にある。『情報リテラシー』教育に十分な時間を割ける図書館員はほとんどいないが、しかし時間を割く事による利点は大きい。『情報リテラシー』教育はゆっくり始め、段階的に進めていけばよい。実際簡単な導入からとりかかり、統合的な教育へという理想へと徐々に努力していくことが大切である。

最後に図1は、日本図書館協会利用教育委員会編「情報活用教育ガイドライン図書館利用教育ガイドライン—専門学校版—」を少し病院図書室用に修正・追加し、著者なりにアレンジしてみたものである。これに関しては、私案であるゆえ、すべてを行うことがよいとは考えていない。できることから、始めることが肝要であるとは考えている。そして、これをお読み頂いた方々から、色々ご意見を賜りたいと考えている。

本論を書くにあたり、色々な方々にご指導を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 日本図書館学会編. 図書館情報学用語辞典. 東京: 丸善; 1997. 93-94.
- 2) 田引淳子: 担当者教育と利用者教育. 日本病院会雑誌. 1999; 46 (11): 177-185.
- 3) 田引淳子: 病院図書室の利用者教育—清水市立病院の場合—. 医学図書館. 1997; 44 (3): 331-336.
- 4) 寺野康宣: 看護図書館がめざす利用者教育. 看護と情報. 1999; 6: 106-114
- 5) Duff, AS: Bibliographic instruction for student nurses: a program outline: Nurse Education Today. 1994; 14: 322-325.
- 6) 石川道子: 看護基礎教育における図書室利用教育の必要性. 看護学雑誌 1995; 59: 321-324.

Abstract

It is serious to be going to collect, catch the movement of the medicine information that progresses rapidly and have the flow like a swirl accurately. The medical staffs who are to the situation are going to obtain information from a many area with every means. They choose a hospital library as the place of familiar information collection, with the middle. Even, collecting various informations, for the medical staff who can become a user we must be going to offer it. As for our library personnel maybe what we ought to do really, to inflect information effectively in response to the demand of a user?

It does a library personnel as the user is able to obtain the information that is about to request in a hospital library, accurately and use, evaluate it and make 'application education' (below 'library user education namely, to acquire ability, present 'information literacy' education)' if any and is not it important to be going to implement?

I intend to be going to think 'the information literacy' the education that go one step farther from 'the user education' that was put to the chief aim conventionally in this paper in this time, and a hospital library be aiming at.

	領域1 印象づけ	領域2 サービス案内	領域3 情報探索法指導	領域4 情報整理法指導	領域5 情報表現法指導
目	<p>以下の事項を認識する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書館は生活・研究調査・学習・研修・業務執行上の基本的な情報・資料の収集・蓄積・提供の機能を果たす部門 2. 図書館は情報・資料の発信・交換の拠点 3. 図書館は種々のメディアを提供する部門 4. 図書館は物理的な空間というよりは、世界に開かれた「情報の窓」 5. 図書館は気軽・便利・快適で自由な休息と交流の場 6. 情報活用技術の重要性 7. 図書館の種類と特徴。特に業務関連の図書館や関係機関の存在について 8. 図書館とそのサービスポイントの所在地 	<p>以下の事項を理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自館の特徴 2. 施設・設備の配置（機関内外のサービス拠点の所在地等） 3. 検索ツールの配置と利用法 4. 参考図書・ツールの存在と有用性 5. 利用規則（開館時間等） 6. サービスの種類（貸出、複写、レファレンス、発注、予約、情報検索、相互貸借、利用指導等） 7. 対象別サービスの存在（患者サービス、部門別、付属医療学校生等） 8. 図書館員による専門的サービスの存在（調査・研究支援あるいは院内事業等の支援） 9. 図書館員による親切丁寧な案内・援助・協力等を受けられること 	<p>以下の事項を理解し習得する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報探索法の意義 2. 情報の特性 3. 情報の評価のポイント 4. 資料の基本タイプと利用法（図書、雑誌、新聞、参考図書、AV資料、CD-ROM、オンラインデータベース等） 5. アクセスポイントと使い方（著者名、タイトル、キーワード、分類記号、件名、ディスクリプター） 6. 検索ツールの存在と利用法（書誌、索引、目録、OPAC、レファレンスデータベース、電子会議等） 7. 検索補助ツールの存在と利用法（分類表、件名標目表、シソーラス、マニュアル等） 8. 情報検索の原理（AND/OR/NOT） 9. 情報探索戦略の立て方 10. 病院外・他機関情報・資料の調査法と利用法 11. ブラウジングの効用 	<p>以下の事項を理解し習得する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報内容の抽出と加工（要約、引用、言い換え、抄録、翻訳、解題、解説、転載等） 2. 情報内容のメディア別記録法（メモ・ノート法、カード記載法、クリッピング、データベースのダウンロード、録音録画、スライド作成等） 3. 情報内容のメディア別整理法（ファイリング、コンピュータによる加工法等） 4. 資料の分類とインデックスの作成法（キーワード、見出し語の付与、分類法等） 5. 書誌事項、アクセスポイントの記述法 6. 発想法（プレストーミング、KJ法、NM法） 7. 分野別・専門別の整理法 8. 情報整理法の意義 	<p>以下の事項を理解し習得する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報倫理（著作権、プライバシー、公正利用等） 2. レポート、論文、報告書、資料の作成法（構成、書式、引用規則等） 3. 印刷資料の作成法 4. AV資料の作成法（OHP、スライド等） 5. プレゼンテーション技法（話し方、OHP、板書法、AV、研究発表等） 6. 分野別の専門的な表現法 7. 情報表現法の意義
方	<ol style="list-style-type: none"> 1. ポスター、ステッカー、チラシ、文具等による図書館の存在のアピール 2. パンフレット、リーフレットの配布 3. 敷地のサイン計画 4. 入社ガイダンス、院内研修での図書館紹介 5. 院長、経営者による図書館利用、情報活用への言及 6. 会議・会合・研究会・業績成果発表での図書館利用への言及 7. コンピュータネットワークによる案内 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 図書館オリエンテーション 2. 案内カウンター 3. 図書館見学ツアー 4. 館内サイン 5. 施設設備計画 6. 院内図書館所在案内 7. 配布物（パンフレット、リーフレット、機関誌等） 8. 案内機器（AV機器、コンピュータ） 9. 広報誌、社内報 10. 院内データベース 11. インターネットを含むコンピュータネットワークの利用案内 	<ol style="list-style-type: none"> 1. レファレンスデスクでの指導（参考業務、調査法指導） 2. ワークショップ、講習会 3. ビデオ上映会 4. (病棟・医局) 部署別指導・研修 5. 院内研修別指導・研修 6. OJTの実習場所提供 7. 情報探索法、整理法、表現法独習用ツール 8. ワークショップ 9. テキストブック 10. パスファインダー 11. 機器・資料の使い方案内リーフレット 12. 電子掲示板システム利用 13. 院内広報誌 14. マスメディア 		
法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入社ガイダンスへの図書館利用・情報活用プログラム導入率 2. 利用率（部局別、職種別、管理職・役員） 3. 一人当たり利用回数 4. 一人当たり貸出冊数 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 好感度 2. クイックレファレンス件数 3. 投信箱の件数 4. 行事の参加者数 5. サービス内容別利用回数 	<ol style="list-style-type: none"> 1. レファレンス件数 2. パスファインダー、参考ツールの利用件数 3. 情報探索法・整理法・表現法独習ツールの利用度 4. 社員の情報発信度 5. 行事の参加者数 6. 情報整理・加工コーナー利用度 		
評価に指導例	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入社ガイダンスへの図書館利用・情報活用プログラム導入率 2. 利用率（部局別、職種別、管理職・役員） 3. 一人当たり利用回数 4. 一人当たり貸出冊数 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 好感度 2. クイックレファレンス件数 3. 投信箱の件数 4. 行事の参加者数 5. サービス内容別利用回数 	<ol style="list-style-type: none"> 1. レファレンス件数 2. パスファインダー、参考ツールの利用件数 3. 情報探索法・整理法・表現法独習ツールの利用度 4. 社員の情報発信度 5. 行事の参加者数 6. 情報整理・加工コーナー利用度 		

日本図書館協会図書館利用教育委員会編「情報活用教育ガイドライン 図書館利用教育ガイドライン—専門図書館版—」日本図書館協会p9-p10,1999. (一部著者が加筆・修正)